

浪華使夫傳

八

89
八遠18
966
8止



門
號 966
卷 8

大清

浪花使夫傳卷之六

遠州佐夜中山麓栗杖亭

三人一同小吉公告子話

招家印

或日奴の小はん泉州の岸和田をいふ要はうりて攻りて早黄昏の
 頃よりありてはとく多ういふ小まんあれは川久しと吹りたりと棟を
 町に離れし時ハ早夜の四つ遠小ありまうり男をとり其次の二人隊を
 登くるありては小はんハ自若し一尺ハ吹ありし安給世より花田乃
 阿たりく来りくるは向ふのうら小はや一尺火ニラ燃出さういふあり火の
 てやありんと通くともさるえれを火の中より人あり一人を色を
 うり男一人をとるさるありやあり女なり小まん通くとさるえれを
 の火も傍よりあり女のいふやん強しや

浪花使夫傳卷之六



源氏物語



源氏物語

ならふよりちを清大少收ひ宿を死んまを攻むる小まんも
 かくは先にお比ふまを清うたふまらう門口をくまを清よ出會ひ
 ありあまうくわゆる海原よ一人あり終にせとをさへ小ばんよ同
 りまは告知を吉事ありて宿も攻むに來りうらうの小西へ
 喧嘩や又言ちう藤出立の候はく門口あり出會われをさへ
 小ばん初にせ終に仁方ありいふ事やうらう萩中よ藤の
 まく清誠ゆきまはるあを告り告知を吉事ありと報
 むるまはる陽にありうらう一日よ夜を清が内よ入られを夜を清
 驚よ信十弁お其も記されは先まありうらう某伊勢系まの飯
 小矢橋の渡り私より中くの口論といふうらう中少獄門のたえ
 ありと我を悪くするう古主よ出會う今ハ大家に候うと候

後がたむとのやまを清が攻む軍を清とやうんといふまのあん
 我まのあかぬぐり小収とつる一攻にり告知をせりさんうら
 清もゆきば立越りといひれを小まんハ花田の墓所を去助文婦の
 言はし逢く事十七日五六教と討べりと告りあはるもゆきはありと
 事と告りれをまもも大に我も兵今十二の渡り柳中を先達を助
 入せし柳のちを小よりある十する五六枚谷が運のある時ありと
 ありせはゆきれもよりあはれゆき息絶あはれといひれを各音の
 思ひとありと一度小款のありありあり事滅よ仁林の流し合ありと
 さよに率十七の進よ利をして上をせん去かぐ若くの用念金か
 かりてゆきれもいん苦を敢りうらう教とけりうといひんせんも口惜し
 いひれを小まん完るとお笑ひ其事を先達と我身信合ゆれを

明の百両持来せん七希介と先達て殺せし報へ者方り吐しとど
 金と集ひしといと生人ハ仲居の良よしと存れ多し
 ありて次合ハりく業とあり一並一が美ら家方立血をくつ首
 尾流本を廻し後ら我益賊と念おくトトく運命の心さ
 城暗しふん心一ツは納めゆといひれを人々感心して其全
 成以て一世の嘆ふれんぬのむく受麻とそ一お立座しとい
 合せ夜ぬく各宿へ帰すなり

法十希及子及使客の軍復讐の用意とみ法

明れハ小波人百両と携へありは各ホチ一世の嘆ふれを思
 けし花やう小出立同きと経の働させんとて先衣若とど好
 法十希及子と白綾の俗ハ先年軍を清う志を盡し法十希及子

持来りしと柄と入させ法十希これとも其子ハ大道寺代傳
 信国の刀杖帯して務負せんと定らる使客とも赤夢ていひ
 白と小袖を着んも仇討小古めりくやいざやをまださ
 羽着よさんと又人々紫羅紗小又嶽の役と付揮と兼綿子
 字と金糸とて経せ是れハ小波人の紫羅紗小ハ山の虚偽の
 と金糸とて経せ是れハ兼綿子の経とて人々物と兼綿子
 一團扇の役と付く者一ハ一五討ふ人時見苦しとさ中
 金貳兩の懐中に入一妖怪のませと敵ハ紅葉持ハ高旗
 と吹つはけ方も同一場ハ幕お迫し見物の時見せし其内
 多く用意せん敵と家来共人斗もあつたりとられし物
 ハ必定かれハ是を防ぐの用意せんまは法十希換え子
 谷



源氏物語



源氏物語

軍支方

軍支方



江田傳次郎



軍兵隊よかりし後入四郎やあらふたすき流成けく海内兩所の助をかせよ
まを備と助の身ある敵の助を刀をさくぐりしまんち救世任
ま流丈婦の老をけりしま入をと助をい忠右ふ十ちふも遊軍一
く何きこも危うく入馳向つて助と用意既よ定まりし
屋平右ふあましくも先達く各方よ足才のちめとあれが
大馬の芳心と勇さんと勇くれとも各攻とつて足下を他か
れ他あつ人とにあれい何か止つてくといさえられし
いおろさげともかゆうゆいんをさく後学のさめなれを是
Pさんと夢入のいふまゝも角も用意とあり十五日の夜
赤のう京都とこりてのいんをい

高雄の紅葉狩小復雙言の使状をい

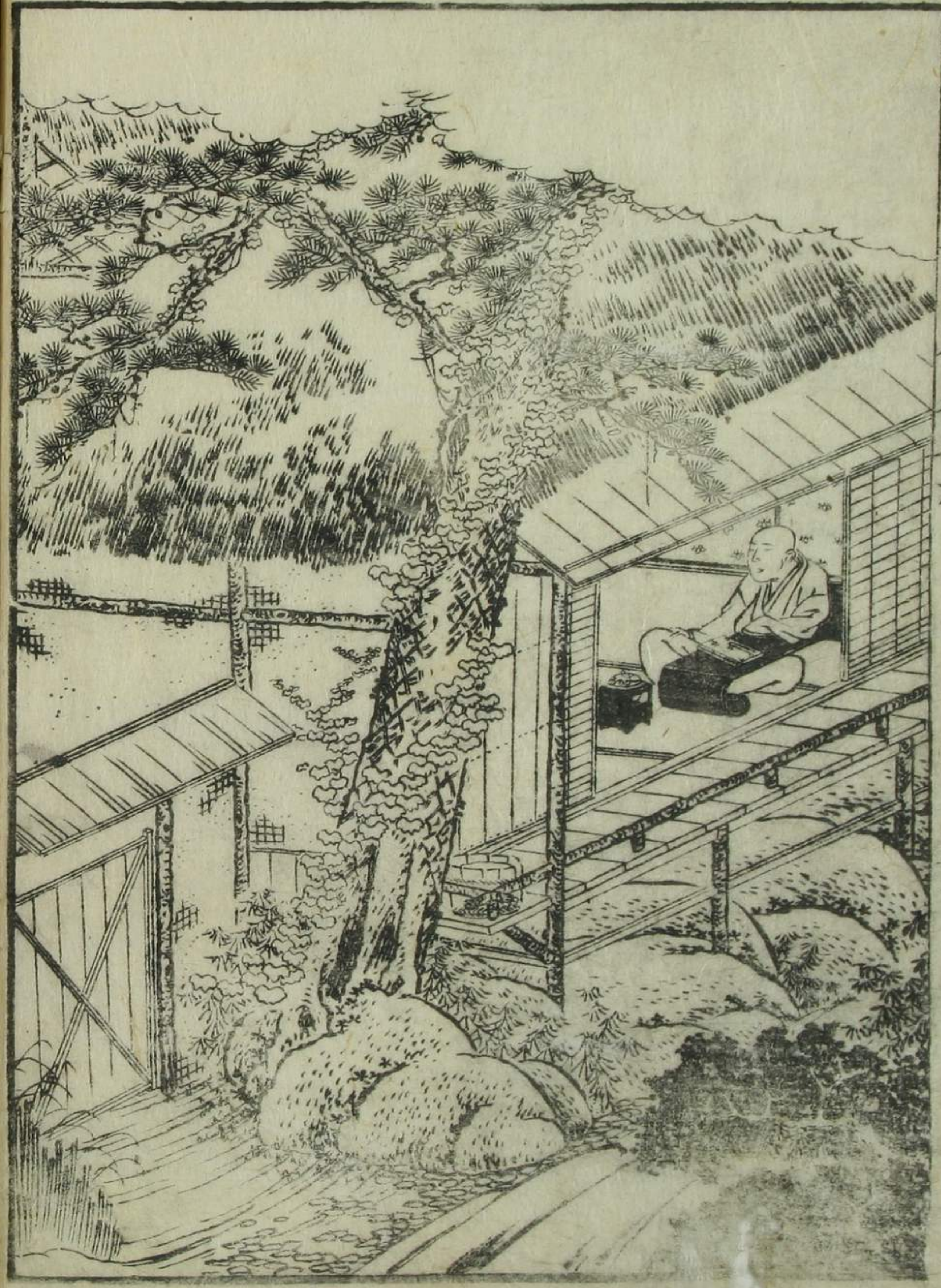
小向書曰天所惡天必誅之とまことあるか救谷軍を傳救谷伊
ら不義く富奸計を金銀と貯へおろけ極免天下
敵あさ公地して京都の木屋町に貸座敷を構へ在京の諸大名
泰村が推威よ恐をさぬくの賄絡とあ人を能くめし
丸山翠と生洲とど昼夜妓と携へ煙酒よふく祇園町鳥系杯
日を送りくるら来十七日よ高雄の紅葉見んとつひ出
頭法師遊妓の數我よくと左膳伊を清とまのまは酒のえ
小文合十人并と赤連十七日の早朝より赤まき高雄へ
のりつくるら日と初しつれを清十布一袋はくも雄
まああやことあこと見廻とよ救谷や救附の幕城山の中
女し平しりぬ更お廻しつる幸の場所ありと曰く其隣

の紅葉の本よはく赤白一羽の換装とくさるるのりせ湯者と推し合
や進一と侍りるわら事とくさるるに谷軍を湯松谷伊を湯松
敵門の庄を湯加若長を湯伊を湯松谷下小猿若々を湯松谷伊を湯松
のものとも十人勅ふる地一若葉仲間十人半一を法陣
孝次持らと十人二十又去人或と謡或い舞て幕の口つとひま
不願のあうさぬりふ登くもあうは空のうれ版あそめいごきよう
のりやうとえんとく奥してあうらるるや傍の幕の内うう立流の大
男立出くまくの命面り葉内一入交子細あうくまの幕より
使よまうくう宣を次教入といひへる加若長を湯何事申んと左
出く鳥とんね黒衣の忠右馬こたよ強しう物とまへ何の由
や、と雲の忠右も一やう一教若軍を湯及松若伊を湯へ石堂

清十希申入る子細ハ先達く親法た為討て退き後さぬく
心を尽し有家とるし今此町紅葉指の由候しとくまのり
う一勇先料ううお侍殿在年来の仇尋常立立會下は
又見交くを地女法師あど教多召連のり松子松葉うあやまち
させりさんも本をさるびとくく由候しあるしけりせアさん
乃使といくやうく繁くは危居あるしとまひ入りきば長
作天一かうたのむと軍を湯伊を湯松く入られ何々の發馬さう
んや大山降うあううん地く機と失ひらうう瀧の軍を湯松と
静め清十希及口上のむ通一業知りしとくまのり
く内心斎藤一入啓あると者を湯松松とせん中ふ使み思はての
由使の赴を感トへは音どもと帰し樂く湯有のりやう



山崎闇斎先生遺稿



浪花役夫傳卷之六

暫時却用捨下さるべし用意致し〜忠ちつと候〜是城
 波居る壬申取持法師養妓女師の輩い〜驚う〜んも〜諺と村
 逸るもの女帝へ改て手と川と幸改持も去禮を〜むり〜
 けらる是を戯切〜死人を隠はものあはは〜死〜り〜谷
 やつて逸るもの養妓と首うり大切なり三味せんた〜り〜
 逸行バ料理人〜鯛と引む〜あ〜村慶と〜り〜逸行を誠〜
 漏いづ〜り〜目も〜り〜き〜ぬ〜か〜
 悪黨〜も〜り〜用意の〜り〜惟子を〜者〜何〜も〜
 名残の盃せんといふ〜り〜も〜未練〜一の軍を〜
 くと出して見〜れ〜手配〜れ〜
 も仁王よ〜り〜逸行人數と改〜れ〜此間〜者〜の〜力〜を〜あ〜り〜ぬ〜進〜出〜

道もあ〜り〜運と天よ〜り〜人〜し〜初〜心と定〜ん〜
 の庄を〜り〜の〜幕〜言〜り〜先〜
 此方の足弱〜も〜不残〜幕〜入〜
 あ〜り〜お〜り〜幕〜内〜入〜

佛雙時ありと紅葉城あを話

庄を清〜り〜を言終つ〜
 石堂法十席生年廿七右白綾の袷〜
 一〜
 白〜
 奴の小〜
 づつ色〜

團扇の紋付被着し、因の宿より血を垂し、しらのことごとく帯りて
 法十布の足はまきり、其の佐より入人の豪華四天王の勢あり、五郎
 紋付に紫羅紗の帯てん、姫籠子下袴、川メ立出、こぬ絨は一人當
 千とぞとくへ、くろの障の幕の陰より追名巻中より法十布、大三日と
 り先年汝が討て立退し石堂法はまつり一子は法十布、汝の奸計の毒
 茶うとくお果し、大道寺金茶番、娘を尋常より務負せよと争ひ、幕
 こつし引らるる中央より救谷軍を遣くさる、推子の上より黒羽二重の
 給城を、後くらまきり引メ白旗とよ二尺二寸の刀、抜拵床机は、舟
 停り、くろの板たたり、救谷、伊を渡是と回し、物立、くろの
 提り、つまきり右の方より伊を遣く、女房小や、白を始り、紅の
 袴を、先、純徳、徳の徳とくも、長刀小振より、返つ、きたる、徳を

と、湯を、舟の者とも、湯桶、く、引、提り、持り、多し、さぬ、と、く、く、せ、え
 へ、く、戦、を、湯、桶、を、ひ、以、真、たる、法、十、布、汝、一、人、ま、く、我、と、折、る、人、す、け、い、
 ま、く、く、く、大、坂、より、く、あ、ぬ、と、ゆ、り、な、く、悪、者、ま、と、物、を、名、取、事、侍、に、似
 合、る、る、く、悪、者、ま、も、も、疾、く、も、あ、ぬ、先、より、く、逆、去、る、一、ま、く、か、給、比、来、者、あ、り
 を、又、人、の、使、を、あ、た、り、場、り、ゆ、り、あ、く、く、と、悪、く、一、ま、く、か、給、比、来、者、あ、り
 が、障、障、の、右、を、湯、を、石、堂、法、を、あ、つ、が、蘇、来、根、付、の、伊、布、を、あ、つ、と、神、を、伊、布
 ち、ま、く、障、障、十、た、り、先、子、は、く、り、死、刑、は、仍、り、れ、く、身、裁、は、介、
 たり、黒、船、忠、右、より、日、田、の、庄、官、忠、を、あ、つ、り、障、あ、れ、を、何、所、ゆ、り、眼、み
 山の如くの者ともあり、又、入、れ、もの、舟、を、湯、奴、の小、は、人、と、り、く、大、坂
 寺、の、家、来、く、石、川、の、助、を、助、り、女、房、と、兄、弟、を、あ、れ、を、救、谷、伊、を、湯、城
 是、近、敵、に、付、移、り、い、く、り、皆、く、ま、く、あ、る、事、あ、ん、子、く、く、え、悟、せ、り、と

之向へて軍を備へたるの眼をばつゝ一戦を度言ひつゝ一我も並治人とて
 と躍り出く誓ひあつても霹靂の如く入らんが隙の治十帝は誓ひ
 こ心弦一々相葉の根よつめばと流れあがりつゝ一もつれをたつろつて
 と軍を備へたるやうに治十帝も二人中あはれなるがやうに治十
 帝へ侍よあつたりつゝ一とつて治十帝の乱れを刀をわつて
 おもひたる口をよつてと根葉を根としつゝ五匹治十帝へ伏せしむる
 延ち投ぶとて突くとて夏子まきつゝ一つて扇を切替へしつゝ
 延ち一々を女力とつてつゝ一とつて扇を切替へしつゝ中
 治十帝起まつつゝ二突三突つゝ一とつて扇を切替へしつゝ治
 十帝も実体ぬれりつゝ一とつて扇を切替へしつゝ治十帝は仕
 業うめつゝ十文字の流りつゝ治十帝と目げつゝ一とつて扇を切替へしつゝ

ちりもとつて伊を備へたる女房小あつて長刀とて車よとつて一わめん涙目け
 切りぬる小あつても刀抜るを先人ませも口を切つて門の先を備へたる
 逃出んとし藤のうへに池邊とて治十帝とつて扇を切替へしつゝ
 ちり先を備へたる大言吐つて一とつて扇を切替へしつゝ治十帝は仕
 い者の敵の敵かれば治十帝とつて扇を切替へしつゝ治十帝は仕
 裂くつゝ一とつて扇を切替へしつゝ治十帝は仕
 ちり一己神踏つて一我と悪口とつて一とつて扇を切替へしつゝ
 ちりちりつゝ一とつて扇を切替へしつゝ治十帝は仕
 根より首筋近切入つて一とつて扇を切替へしつゝ治十帝は仕
 つれと切入るが又人の英雄事つゝ一とつて扇を切替へしつゝ治十帝は仕
 けし一とつて扇を切替へしつゝ治十帝は仕



浪花傳卷之六

ちのうらふ方なく或は谷へまうび茂成をこぼす又足と切く削きり
 と又人の者とも悉く切絶しつるは討もいまこ侍人しんしおの弁
 女房小ふいと奴の小まんは追つまううひーがやもそれ伊まん
 先さうしくして毒入を突付くせんとする小小まんあゆみおく色し
 う花刀よそくりれ刀どそう驚し眼しおまうゆくとくくうあ
 へしとや俄り春風の起り紅糸らんまんを取れ披露支那う
 へ吹付れれをさううう紅糸より目鼻もこり眼を閉くすあさうど
 ろくお瓜踏ぬく終り侍番と切伏りる女房小うでもそれとんこ
 懐ふやうけ勢お小まん足瓜踏ぬく切込刀よ小者う後後とく切
 又あしれそらんといさく削きりるお人へうけ多て終りる瓜に
 りれを指のさううあゆみや斬やうしり声斗して風もおさめ

けりころろ人又人の勇士もまきうろくくうと終りる小者侍十
 帝軍を流る首切打落し父の位牌と取絶し其瓜をうくれと赤き
 支那も伊を流る女房う首と切く玄助支那が位牌は赤向り
 寔は我ひは指のさうおあさう谷底道紅糸しとくうささる力
 小深かーらるは討の人々の心結しとくうあんとおしとくま
 さぬしくあられなり又帝あも大しおひおら空皇子あさう
 大坂へ帰るしと袖と拂つくとおひさうまう侍十帝ハ衣服と改京
 都の執権秋田城之介よ訴くれと悪く結蔵寺家とく五屈在り
 敵討ふれば城之介お立出て侍十帝と稱しそ外の者どもの来由と
 聞紀し給く早速豊後へ飛脚と送立のへ大守と村介おひの
 警固の武士殺多る登られ城之介殿へも使者とりて伝くの礼謝

もはやさの小大坂へゆくしとのりかたをたひひし怒り不孝の罪はか
へありふがう親うも討白すび又く大坂へ立返るんぬく不孝の由は
やつて夢うて目田へゆくりり去る時を再び清十郎の御まし
船比奈女ちろ老幸うと勤りうとくまば時友を伴仕度とてやま
振切ゆく浪花へゆくれば花を信文婦と申すゆへお比奈を
と名のり新し百倍しとく業へくろ小主人を清十郎しる百人金成
再び大坂へのびり七布介の御園治村へ立返りうととを歩ゆりつ
れば七布介の御まし身上げ候くと妻へ七布介の御まし今
めくしととくしありしをいれ金成が七布介ありとをたひひ
いうるりやう大金成給くと不審しされればおハハくか見
く先見し七布介と教し益ありし百友の金と返せんし

し小島今中くハお船も西國へく仕合ししとて金と金
たくもくしととくしありしをいれ金成が七布介ありとをたひひ
おさしし馬今中くしとて金成の御ましの不仕合とて難儀しとせし
大今と下これ再びお城起と申すもうく金の所益下これし
とてお船の御ましとて返りしお島しりく小主人と石牌とてし
祠堂金と納むる石川郡兵助が村へ立返りし物寺へも祠堂金納む
石牌と建残ふなりしとて返りしお島しりく世の中の墓分
さるしとてお島しりくまよ妻と抱し我と法師しりく名正貞と改
再び大坂へ立返りしとて返りしとて生としりくお島

五人の使客再び権六の逢ふ話

夫より又人の使客ハ豊後と立出同防進ありしが驚く十ありハ
 筑紫權六と逢く過つるの恩と謝せん皆くお連暫く住居せし
 処ありと山口さしうりありあり酒家もあふはく不思
 と山路とさけく入ぬましと石門のありも草せくしてさし人あ
 ことまへに於真深く合入さしと寄藤は作をせし家居も
 建ふく括く物の田鼠糞のこなんを又人の人くもあはれ果てハ
 權六も召捕りししやいかに事まはれ多く書信もせざりし
 いくせんといひまきまのくるとえとく於真深く權六も居間へ入
 るれと壁よ一首の古歌残す

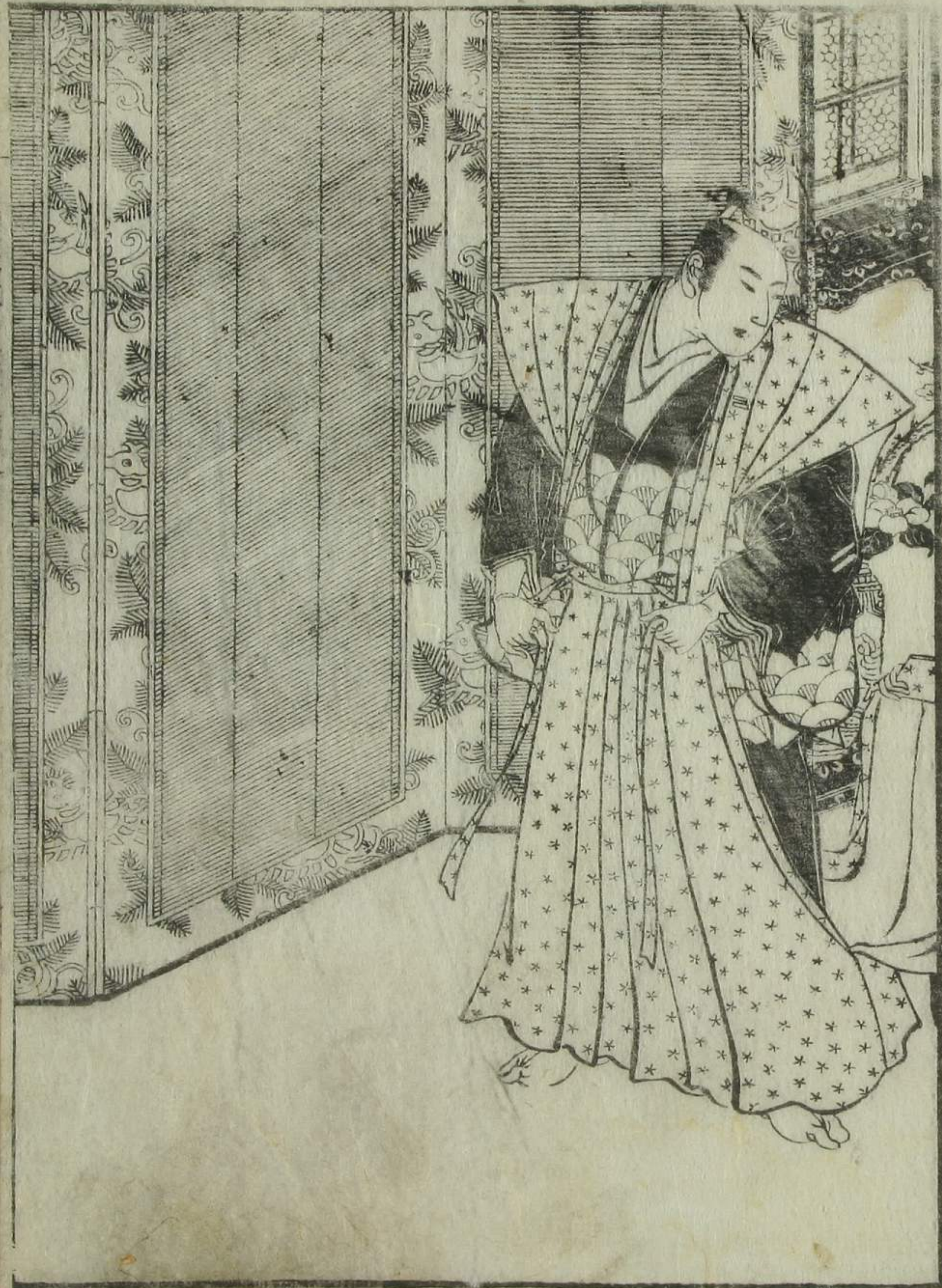
中々山の真を倒しけし
 ともや人のそむけしとひま

扱く世一と何國へ立出ぬんまど言早日もくまぬれをこの
 空房よりやどりて翌かん住まぬと一と傍と有身ら小虫をこた
 ぐ赤もあつ菊かどもまきあつれをおうて赤赤りて紫赤く
 産くこれ飯たふ産くを夜へはあややう夜ぬれをいひなまて住ま
 へ出んとさるりるかしこいいうよと谷へいびびと峯とよらくねとあく住
 来つらぬは竹もやう作るまきくそと又人も澄くくと根も根も根も
 うも見えあれを係は細く道あり扱と人のけをよあかんとか成りく
 又人おつるを氷と下りまれば山あり第のまあり内詩と備らる成
 と其詩よ曰

生年不満足百
 晝短苦夜長

常懷十歳憂
 何不來烟海

生年不満足百



浮世画師
松好之右衛門

五人の使客これに聞て是凡人のありては立寄て性来道とも尋
 ねて十右衛門の扉に立寄て是れ性来の者なりて周防の山
 口より道を通ひて入る者なり何れをわねとたもて
 性来の道とて一ひた多くと懇懇と迷れを夫と無や思ふ
 思へ給ふらん夫とて暫休と給へ道もた一人ありせんといふ
 殊務なり僧なり目と定て是とてんが量計しん是則筑紫權六
 たりり其六十ちあたまは髪は白く首領とてすしはくや君と尋
 山より入る舊宅一夜以明一夫より道を通ひて出たりあり
 ちうりなくまきまき一子の不思議はよくとておバ大云清もはより
 こんなまぬぬ跡あり又人徳も肉に入りて清十帝及び子孫も
 多雄とて敵救谷と討とり清十帝と國へ伴ひたりと太守も
 五のよといへるを拂つて取てり身といふありては

五のよといへるを拂つて取てり身といふありては
 移りしよとて尋ねられ格をて心と感し一ちを田毎が自害を善智職
 ち出家とありては瓜隠しは不と、庵と結び坐禪、眼とて一ひつ
 ぼく一生瓜老とて堪堪の一時業の盛と待ぬ世中は何ぞ百子のたくと
 ちさん足下をたもて我身のて親とて使客の業や外ありと悟
 ち業と出しく業と出しく業とあてり日の能くお出せ性来へ出り此世
 ち飯の世のれはりの高し心をてせのふありて心くも又人のくも
 ちとて出り性来の道の教麻引を入られ格六法御、
 ちとての深と袖の色あがが運性来出とて板とてのけり

五人の使客相撲の巻

くれを私裁の十ちり大よ頼一とら一與あり人々神事の角
 加一口論めくせんハ神あへの悪をこは方成も少一お撲と好
 一子の竟へもゆあはもの心はバヤ出しみく曲く了方ある一
 と花ひくれをさ所樓座瀧行と扱くその方たちすよこのいふも
 たしおと効くハ面白一我く又人傷は神子角力ヲ出れども
 又人立一年も負一事なくまふ與ありまゑ方大坂人となえれを
 定く懸くあらん立會り人とはと引立れを忠ちちつ初めく大坂者よへ
 とも角力ハふをこれなく行とて園方達の行扱も及むんやう一あわれ
 とこびりまは波ト返ひらるハまゑぐくお撲しりあつて宿守の返え
 ありしがさしと六チあつて多くれを物以系根津とらけく角力好え
 をさあつとそはわくのあらん程あるをやと中小部入成やとあつた

一言あれば我々西遊のあつたを成す一れと一生仕ていずと友人程うあつた
 せむ十あふ忠ちちこれにまれとも受入をまうく土儀へつて有る女夜を清れ
 ろさ又尺八寸色白く髪も三寸斗巻立能儀よりわくつふ字以系糸うく後ハ
 たる禪引あやゆりさあつたやうにあつて関をとりく又人の夢にお遠くつれを
 行かとの事あつんと播磨の五六番去儀へゆきさ出たり色黒く眼大よ
 御殿たちへあつたさも恐一見物と與入お思ひもあつた相撲も
 何卒あの白さコカの猪より一喰ひる行司團扇とらう懸一こや播磨
 殿つて朝は素と名をまると團扇をとりつ引れを播磨殿を物の
 事一投分んとうさようつて押処と物以系をむさうとあつたれを土儀
 の中へまらさつたぬと埋まらる日以の廣言以係もれをさうめさて物以系
 張系もらるは帝ちちも押一あつたあつくと土儀へ入れを物以系

東海道志

三十三

たる砂置ち先の取次とぐんとあこ踏あつて一と向へ根津はが
 小松あれば下子と組んで働かせばとさそとさそと小松と矢川と
 土俵の舟へ突出一とさバ面目あけよ逃入る一の谷岸ち六尺斗り
 の大男と人のりら丸負かえとくさう十二分の怒り成腹し己つと
 つくせんとして振とさそとまゆれば其忠あつて面辨花のどく
 入人八寸の男が流くともやうなる男と見物其男ぬくと稱し
 やと敵とさへを傳はしは行き者ぬ大刀あればつり務屋の
 ともくさへ忠あつて二足二足歩く者処とさうさ一と谷をさう
 首より破るくちを斬りといふく投付たればさそとさそと
 人外とさそとさそとやまざりたる種のをさ落へ美法の人あ
 ければさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそと
 けバあちと雲津おと号んとさそとさそとさそとさそとさそと

者よりくかき緒りたればさそとさそとさそとさそとさそと
 さそとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそと
 二つ斗投出一とさそとさそとさそとさそとさそとさそと
 明石河浪をかき人足外者一の者さそとさそとさそとさそと
 と心と静あつてさそとさそとさそとさそとさそとさそと
 男けつとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそと
 如く何れも負あつてさそとさそとさそとさそとさそとさそと
 さそとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそと
 さそとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそと
 孤るうのせりさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそと
 さそとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそとさそと

川つ葉や 巻巻の道の一里塚
 け敷分をそとく又人良公え合し扱く面白く玉白け 縁く使客とふり
 といつまでば安かきあらん我く扱うをうとく寺まうせんといれあれえよ物
 比奈黒船ふきのとそよと後撤さるんら口惜さすよわくぞや小町が侍の
 うつで子のつりさうしと縁んもさひかき侍づ宗匠の仇目よかろも今う
 眼くく縁が老まむい縁を人まんせいまし 仇眼と言捨く何國ともか
 出たりく夫よりハ此人くの仍おと終り 縁ものかうりる 宣嘩やるあ
 も何國へゆらん 縁縁よんさうらんこハ不思議あうし思ひくされる中
 或夜の夢ふあそ久知の妙見と思ひくは更あうしよまふ友えんし赤色の
 官人並飛より往まく 仇戸使用と北辰あられまひまれ五星公呼出し罪
 と免せよくわうられむ彼の官人まの星公伴ひ出るれを我予るの取紙

十たの根津四郎右方鐘のちえ湯朝比奈友湯黒船忠ちあめりばれを大
 小勢死うれらむ 縁縁旦の敷分と雲く何地へゆらん 町とあうさうしよ今ハ
 変何うなまやちんと目決定く妙見兼公様となれハ喧嘩屋のみやあ
 ここの不思議と思ふうら此者とも老と放つて虚空城よりて上りくまを
 宣嘩屋をなまうとんしも光明公放しと空中へ入る人若山不思議の思ハ
 とふれし思ハ是も又南下の一變たりたりあうりとつれバ今更の我を
 究く金銀糸袋懐なく賣声の春りさうさよ扱らるれふんし五星
 の罪も今しを許さるあ 縁縁て免れらるも縁さやあうらん現さやうらん

浪花使夫傳巻之六大尾

遠州佐夜中心寢麗 栗枝亭鬼卯著

浪華浮世畫師 松好斎半平畫



書工 大坂 佐川祐助

刷人 京都一二四五六之卷 樋口源兵衛
大坂三之卷 市田次郎兵衛

○ 来辰之年新板目錄 泰文堂

松好斎著 繪本倭画系紙

此書をむうしうるは、物事の教くを
経るに類して、浪華画系紙の如く、
事とあつて、うらやまとして、
近刻

栗枝亭鬼卯著

伊勢日向 之る本系紙

松好斎画

此書の云ふは、伊勢や日向の如く、
浪華の如く、うらやまとして、
事とあつて、うらやまとして、
近刻

書

林

京都寺町通佛光寺	河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目	須原屋茂兵衛
同 貳丁目	山城屋佐兵衛
同 貳丁目	須原屋新兵衛
同 四日市	山城屋政吉
同 本石町十軒店	英大助
同 下谷御成道	英文藏
同 大傳馬町貳丁目	丁子屋平兵衛
同 芝神明前	岡田屋嘉七
八坂心齋橋通本町角	河内屋藤兵衛
八坂心齋橋通本町角	河内屋茂兵衛

